

話題の写真展から

堀 瑞穂
(フォト・エディター)

ロバート・キャパ／ゲルダ・タロー 二人の写真家

本展は20世紀を代表する報道写真家ロバート・キャパと、彼の公私にわたるパートナーだったゲルダ・タローの物語という一面をもっている。もちろんそれは本展のメインのテーマではないが、二人の足跡をそれぞれの個展というかたちで並列させ、結合させるという画期的な試みによって、没後50年を隔て薄れつつあったキャパの実像をより鮮明に浮かびあがらせることとなった。(2013年1月26日～3月24日)

タローがキャパと出会い、ともにいた時間はわずか4年あまりにすぎない。彼女はスペイン内戦の取材中に乗っていた車が戦車に追突され、その衝撃で投げ出されて27歳の若い命を閉じた。またキャパはよく知られているように、41歳のときインドシナ戦線の取材中に地雷を踏んで亡くなるのだが、彼を報道写真家として決定づけたものは、タローとともに幾度となくスペイン内戦の現場におもむき、共和国軍側に立って取材に専念したことによってだった。その背後に二人の、強い密度の濃い交わりがあったのだ。

デビュー作は傷だらけのトロツキー

キャパは本名をアンドレ・フリードマンといい、1913年にハンガリーのブダペストに生まれた。両親はユダヤ系の出自だったので、彼もナチ政権によるユダヤ人排斥の動きが強くなるころにはベルリンに移り住み、専門学校でジャーナリストの勉強を目指していた。しかし経済的理由からすぐに退学、知人のついでで写真通信社「デフォト」の暗室係の職を得たのが転機になった。このときたまたま撮影をまかされたのが、彼のデビュー作となった演説をするトロツキーの写真である。

キャパのコーナーの最初にあるのが、この作品である。コピーを読むと、ネガは保存が悪く、劣化し、さらに多数の傷がついているため、後にプリントされたものは粒子が荒れ、汚れて見にくくなっているが、これが後の名作「ノルマンディー上陸作戦」(展覧会タイトル「<Dデイ、オマハ・ビーチ、ノルマンディー海岸>1944年6月6日」)のカットにも通じて興味深いとあった。ノルマンディーの名作は、巨大なパネルに拡大され東京

都写真美術館のコンコースの壁面を覆っているので、写真ファンにはおなじみだろう。この上陸作戦を撮った連続カットは、現像処理で失敗し、現在のようになったのだが、かえって臨場感が出ていると評価も高い。

二人でスペイン内戦を撮る

話を戻すと、デフォトでの仕事からほどなく、アンドレはパリに出て本格的に写真家を目指すことになった。生涯を通じて親しく交流したデイヴィッド・シーモアやアンリ・カルティエ＝ブレッソンらと知り合ったのもこのころである。

一方のタローは本名をゲルタ・ポホリエといひ、アンドレより少し早く1910年にドイツのシュツットガルトに生まれているが、23歳のときパリに出て20歳のアンドレと出会った。英語、フランス語、スペイン語ができた彼女は、アンドレの知人がやっている通信社リアンス・フォトで写真編集の補助をやっていたことで知り合い、アンドレの担当を務めるかたわら、彼から写真の手ほどきを受けた。

こうしてキャパのスペイン内戦の取材に同行するようになったのだ。スペイン内戦(1936年7月～39年3月)はくりかえされる左派と右派の対立から起こったもので、左派の人民戦線政府と右派反乱軍との争いである。反ファシズム陣営である人民戦線をソビエト連邦が支援し、ファシズム陣営をドイツ、イタリアが支持、結果はファシズム陣営が勝利したが、この内戦でアンドレは左派陣営の共和国軍を支持し、左翼系の活動歴もあるゲルタもためらうことなくアンドレに同調した。こうしてアンドレとゲルタによるスペイン内戦をテーマとする報道写真活動が始まるのである。

すでに述べたように「キャパ」は本名ではない。写真家として売り出すためにタローと二人で考え出した架空の写真家名である。ヒントとなる名もあったというが、わずか2音が放つインパクトは思いのほか強い。二人はこの名前を使って報道写真の撮影と売り込みを始めたという。「キャパ」の名は当初、商売用のクレジットという感覚だったのだ。同時に「タロー」の名も、二人と交流があったとされる、パリで絵の勉強をしていた

岡本太郎の名を借用したものといわれている。だが、「キャパ」の名が知られるようになると、アンドレ自身がキャパとなり、ゲルタもタローの名で仕事をするようになっていく。

こうしたゲルタの存在や、キャパ、タロー命名のエピソードは、あまり知られていないのではないだろうか。

キャパとタローの足跡をたどる

本展のうちキャパの作品は、横浜美術館の「キャパ・コレクション」192点で構成されている。このコレクションはキャパの実弟であるコーネル・キャパ(実弟も「キャパ」の名を用いている)が設立した国際写真センター(ICP)から購入したもの、およびコーネル・キャパから寄贈されたもので同館最大のコレクションである。今回、キャパ生誕100年を回顧することになって、初めて全作品が公開された。

ここにあるのは、7万点のネガのうちの192点にすぎないが、その内容は濃い。展示は「初期」、「スペイン内戦」、「日中戦争～第二次世界大戦初期」、「第二次世界大戦期」、「第二次世界大戦後」の5章に分けられているが、キャパの足跡を過不足なく伝えていて見応えがあった。

わけても特筆しておきたいのは、5章で展示されている来日時の作品である。キャパの属性である戦争のイメージを取り除いたこれらの作品は、われわれがふだん目にする日本の写真家の視点と通じるものがある。キャパは普遍的な感覚で日本をとらえているということだった。

またタローの作品はIPCが所蔵作品をもとに「女性初の報道写真家」として企画したものだが、キャパとの共同作業における氣息とスペイン内戦の実情が、その短い写真家人生とともに83点のなかに凝縮し、キャパの隣にこういう人がいたのかと改めて感心させられたものである。

キャパとタローの共同作業におけるスペイン内戦の作品は、無記名のまま作品が混在しているものもあり、どちらが撮ったものか同定するのが困難であったという。しかし、近年の調査研究によってタローの作品の全貌があきらかになったのである。

崩れ落ちる兵士は生きていた

そのことと少し関連するが、スペイン内戦における通称「崩れ落ちる兵士」(展覧会タイトル「<共和国軍兵士、コルドバ戦線スペイン>1936年9月初旬」)の1枚について触れておきたい。この「撃たれて倒れる瞬間」を撮ったショットは、いまやキャパの名なくしては語れないほど、よく知られた作品である一方、あれはヤラセ写真、兵士は死んではいないなど、とかくの論争



写真展のチラシより

の絶えない写真でもあった。ところが今年の「文藝春秋」1月号にノンフィクション作家の沢木耕太郎がこれについて入念なる論考(「沢木耕太郎渾身のノンフィクション キャパの十字架」)を発表し、長く語られてきた写真の通説を覆したのだ。さらに関連番組として沢木自身が登場するNHKスペシャル「運命の一枚」も放映され、わずかな手がかりからベールにつつまれていた謎を解明していく推理ドキュメントにしばし見入ったのである。

沢木の論考は、このショットが撮られた場所にタローもいて、キャパは常用のライカで、タローも常用のローライフレックスで同じ場面を撮影していたことから、二人がそれぞれ撮影した一連のカットを見くらべることで、これは戦闘訓練の様子を撮ったもので、兵士は撃たれたわけではないことがわかったと結論づけたのである。

本展でもキャパとタローが同じ被写体をそれぞれのカメラで撮った作品が展示されていたが、使用カメラはキャパがライカ、タローがローライフレックスであるため、トリミングされていないかぎり、二人の作品は同定できるわけである。しかし当時の雑誌メディアでは、著作権は撮影者になく、撮影者の名前も明かされない場合があったことから、とくに共同作業をしていた二人の写真の同定が困難だったという。

克明な取材と分析が身上の沢木は、また写真家であると同時に、キャパに関する数冊の翻訳書もある。長い間疑念のなかにあったこの1枚の謎を解明する気迫あふれる「文芸春秋」の推理分析およびテレビ番組の内容には間然するところがない。

この「名作」をめぐる検証は、写真展とはむしろ無関係の話題ではあるにしても、写真の歴史に一石を投じることになるのは間違いないだろう。事実、そのことを頭において今回展を見た筆者には、スペイン内戦の舞台裏におけるこうした二人の出会いと交錯が大きな好奇心力にもなっていたのである。